

ゴズラン歿後の一〇六七年、聖堂全体の改築工事がはじまり、一一〇八年に内陣が完成。フランス王フィリップ一世（在位一〇六〇—一一〇八）が埋葬されます。そのさい、聖ベネディクトの遺骨も墓所から地下聖堂へ移されています。ゴシック時代になるとフランス王は拠点をパリにさだめ、サン・ドニ大聖堂を菩提寺としました。フルーリの繁栄はロマネスク時代まででした。

聖堂は一六、一七、一九世紀と改修をくりかえしました。柱頭彫刻も後代の作がまじっています。堂内のみどころは交差部の床の装飾です〔42頁〕。修復もありますが、多くは中世の作で、紫大理石や孔雀石、蛇紋岩などを幾何学文様に美しく組みあわせてあります。とくに祭壇手前はゴズラン時代のものです。これらはテッセラ（細片）をはめこんでゆくモザイクではなく東方由来の組石技法です。古代ローマで

も好まれた装飾で、「オプス・セクティーレ」とよばれています。キリスト教の聖堂では古代末期から作例がありますが、多くのこるのは一世紀後半から一二世紀。なぜかというと、教皇グレゴリウス七世（在位一〇七三—八五）によるグレゴリウス改革（世俗権力の干涉を排除する運動）の影響で、初心にかえろうという主張がなされ、古代の技法であるオプス・セクティーレもリバイバルしたのです。とはいえたゞaigneと同様、素材も職人も当時の先進地域だったビザンティンのみだったので、教皇のおひざもとのローマ以外では、ビザンティン帝国と関係の深いアドリア海沿岸や南イタリアに作例は集中しています。それなのにここフルーリにもちゃんとある、しかもグレゴリウス改革より半世紀もまえに——。修道院長ゴズランの古代への思いの深さに、胸があつくなりました。

## 修道院改革の時代

小澤 実  
歴史家

Minoru Ozawa

フランスの屋台骨である中央高地の一部をなすセヴェンヌ山脈より、北フランスのオルレアンへ北進し、そこから西に折れて、トゥール、アンジェ、ナントという中部主要都市に潤いを与えるながら大西洋へと注ぎ込む。フランスに数ある川の中でも有数の流域面積を誇るロワール川は、大西洋から遡航可能であるがゆえに、数え切れない人々が行き交い、

デイクトと、その妹で女子修道制の祖スコラスティカの遺体が、イタリアのモンテ・カツシーノより移葬された。イタリア半島がランゴバルド人に荒し回されたことを理由として、である。その結果、イタリアのモンテ・カツシーノにある修道院の総本山が、このロワール川沿いのフルーリに再現された。サン・ブノワ・シュル・ロワールとは、ロワール川沿いの聖ベネディクトという意味である。西方修道制の祖とともに修道院の名声は、西欧から広く人々を惹きつけた。

八六五年、修道院はロワール川を遡航してきたノルマン人により焼き討ちされた。その後も、何度も襲撃を受けることになる修道院は、堀をめぐらし要塞化することで、外敵から共同体をまもつた。その共同体はいずれフランス革命によって離散の憂き目に見るが、第二次世界大戦後に再興し現在に至る。

この修道院がひとときわ輝いた時代がある。紀元千年前後の修道院改革の時代である。

紀元千年前後のヨーロッパは、しばしば混乱の時代と言られてきた。内にあつてはカール大帝のカロリング朝フランク王国が解体したのち、地方領主が自らの権益を主張して跋扈し、外にあつては北からノルマン人、東からマジヤール人、南からイスラム勢力が押し寄せて破壊と略奪を繰り返す内憂外患の時代であった、と。歴史的な事実としては間違いない。実際、フルーリ修道院も、ノルマン人の襲撃を受けたし、周辺の領主との土地争いで緊張もした。同様の問題はフルーリにとどまらず、北フラン

ンスの他の修道院でも繰り返された。その惨状は、同時代の年代記などが悲痛に訴えかける。

しかし、というか、そういう時代であつたからこそ、各地の修道院では、來し方行く末に思いをめぐらし、修道院そして修道士本来の役割を見つめ直す動きが求められた。六世紀前半に聖ベネディクトにより定められた、服従・清貧・貞潔を説く「ベネディクト戒律」の教えに立ち戻れとの動きである。從来のごとき貴族的生活におぼれることなく、修道士本来の精神生活を送ることこそが肝要である、と。その筆頭は、九一〇年、アキテヌ公によりブルゴーニュ地方に創建されたクリュニー修道院である。

しかしヨーロッパ全体に広がる改革運動は、ただクリュニーのみの功績に帰されるわけではない。ローテリングンのゴルツエやイングランドのグラストンベリーでも、一世紀になるとノルマンディのフェカンやル・ベック・エルアン、イタリアの総本山モンテ・カッシーノやドイツのヒルザウでも独自の刷新運動が進められた。ヨーロッパ各地で、およそ同時に多発的に、改革を求める声が各地から上がつたのである。このような全ヨーロッパ的な、修道生活原点への回帰の動きを修道院改革運動と呼ぶ。フルーリ修道院も、そうした改革運動で名の知られる拠点のひとつとなつた。

「知の頂点に達したアボンは、その知を他者にも得させることを求められ、教鞭を執ることになつた。彼は数年間教師としてつとめていたが、未知の知識に到達したいとの望みを抑えがたく、叡智の集まる

場所へとおもむき、これまで習得していた文法学、算術、論理学だけではなく、その他の学芸も身につけていたと思うに至つた。そのためパリとランスの学校に向かい、そこで教授している知者の言葉に耳を傾けた。そしてしばしの間、天文学を学んだのである……」（エモン『アボン伝』第三章より）

改革運動をより具体的に知るために、その中心となつた四人の人物に目を向けていた。修道院長をつとめたアボン（院長一〇八一～一〇〇四）とその後継者ゴズラン（院長一〇〇四～一三〇）、そして彼らの伝記作家でもあるエモンとアンドレである。

フルーリで教育を受けたアボンは、先ほど示した『アボン伝』に見えるように、パリとランスという北フランスの知的先進地で学問を修めたのち、当代一流の知識人として、復活祭計算、文法、教会法などに業績を残した。彼はイングランドのラムジ修道院に籍を移し、折しも進展しつつあつたイングランドの修道院改革にも影響を与えた。フルーリの修道院長に選出されたアボンは、ユーゲ・カペーの助言者であったオルレアン司教と対立し、世俗権力と深くつながる当時の司教の倫理に疑義を呈した。清貧の修道士の理念を教会も理想とすべきだと考えた、教皇グレゴリウス七世が主導する、のちの教会改革を先取る議論である。しかし一〇〇四年、改革をすすめるためにフルーリの属院であったガスコニュのラレオール修道院を訪れたアボンは、在地の対立に

アボンの下で教育を受けた後継者ゴズランは、一

○一二年より、ブルジュー大司教職という要職も併任した。カペー朝の創始者ユーラ・カペーの庶子とも噂されたゴズランは、苛烈な政治家でもあった。聖俗の有力者たちとつながつた彼は、フルーリのために、様々な特權を獲得し、土地を集積し、金品を蓄えた。隣接する領主たちがにらみ合う戦国時代と言つてもよい時代において、フルーリは繁栄した。

修道院の財産は、修道院の建て替えだけでなく、修道院の近辺に数多くの修行所を用意するためにも用いられた。修道制を推し進めるための投資と理解すればよいだろうか。逆説的ながら、修道院改革は混乱の時代に輝き、修道院は領主が寄進した土地財産により栄えたのである。

乱世にあって逆に主導力を發揮するふたりの修道院長の業績は、『アボン伝』と『ゴズラン伝』という伝記によって知られる。前者を記したエモンは、修道院長アボンの命により、多くの歴史書を著した。メロヴィング時代より書き続けられてきたフランク王国の歴史の続きを『フランク人の歴史』に記し、聖ベネディクトの聖遺物がいかにしてモンテ・カッソーノからフルーリに運ばれたのかを『聖ベネディクト奉遷記』で喧伝し、フルーリ修道院創建以来の修道院長の来歴と事績を『フルーリ修道院長の歴史』で整理した。

しかしフルーリ修道院長にとって最も重要な意味を持ったのは、聖ベネディクトにまつわる一連の奇跡、それも修道院と関係する奇跡の歴史を記録した『聖ベネディクトの奇跡』である。修道院長の監督のもと、この「奇跡」におおよそのかたちを与え

たのは、エモンと『ゴズラン伝』の著者アンドレである。修道院改革とは聖ベネディクトの教え「ベネ

ディクト戒律」に立ち戻ることである。その教えの起草者聖ベネディクトの遺物を保持するフルーリ修道院において、その人物の奇跡を記したのは、フルーリこそ修道院改革の中心たるべしと自任していたからなのかもしれない。

二人の修道院長が、修道院の物的繁栄によって修道院改革を進めたとするならば、二人の伝記作家は、歴史の記録によつて修道院の地位を高めた。両者は無関係であるどころか、密接に関係がある。物的繁栄のおかげで充実した蔵書を誇る図書館を備えていたフルーリ修道院であったからこそ、その蔵書を典拠として、二人の歴史家は、多くの歴史書を著すことができたのである。フルーリ修道院の歴史は、混乱の時代と一蹴されがちな紀元元年という時代の複雑さ豊かさを証明している。

九八七年、カロリング家の断絶を受けて、パリ伯という地方領主であったユーラ・カペーがフランス王に選出された。彼を始祖とするカペー朝は、一三二八年にヴァロワ家のフィリップ六世が即位するまでフランスを支配する王朝である。そのカペー王権

にとつても、フルーリ修道院は大きな意味を持つていた。

そもそもフルーリ修道院はパリ伯領内に建立された修道院であった。それはすなわち、パリ伯であつたユーラ・カペーによつてカペー朝が成立した後、フルーリ修道院は王領地の修道院となつたことを意味する。紀元千年の修道院長らが、財産を集積し修道院改革を断行することができたのは、その背後に成立間もない新興王権と修道院との間の密接な関係があつたからであろう。ゴズランがユーラ・カペーの庶子であるという噂も、そうしたつながりを示唆しているように思われる。

フランス王権にとって最も重要な修道院は、言うまでもなく、パリ近郊のサン・ドニ修道院である。フランス革命以前のほとんどのフランス王はこのサン・ドニに埋葬されており、王家の菩提寺といつてよい。しかし若干の例外もある。その例外の一人フィリップ一世（在位一〇六〇—一〇八年）は、このフルーリの地に眠っている。アンリ一世とキエフ大公女アンヌとの間に生まれたフィリップは、ノルマン征服を成功させたノルマンディ公ウイリアム一世の同時代人であり、クレルモンで教皇ウルバヌス二世が十字軍説教をおこなったときのフランス王であつ

た。彼自身は、王であるにもかかわらず、離婚騒動でリヨン大司教から破門を宣告され、それを理由としてか、このフランス王の第一回十字軍への参加はかなわなかつた。しかしフィリップは、「王権の覚醒」と呼ばれるフランス王権の最盛期のはじまりを告げるルイ六世の父として、四八年という長期の治世において、その後のフランス王権の基礎作りをしたと評価される。埋葬地としてフルーリが選ばれたのは、この時代にあつてもなお王家との関係が深く、国王を埋葬するに足る名声を維持していたからであろう。

一二世紀以降、ゴシック建築の雄として、修道院長シュジェの名前とともに、そして聖ディオニシウス（サン・ドニ）信仰の隆盛とともに、サン・ドニ修道院はフランス随一の修道院として名をはせる。それと反比例するように、ロワール川のほとりに立つフルーリ修道院の名前は、忘れられがちなフィリップ一世といふ王の名前とともに、数ある修道院の一つとして歴史のなかに埋没する。しかしそうであつたからこそ、フルーリ修道院は、在りし日の姿をいくばくか残した現在の姿を、わたしたちに静かに伝えていく。